

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】北野 彩

【所属】(助成決定時)

東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム

【研究題目】

住民主導の開発と「ローカル・ジェンダー・センシティビティ」:インドネシア西ジャワ州ボゴール農村部における環境啓発活動を事例として

【研究の目的】(400字程度)

本研究は、開発実践におけるジェンダー配慮のあり方について、外部者から提示されるジェンダー平等やエンパワメント概念に依拠する形でなく、現地の人びと自身が自発的に実践するジェンダー配慮のあり方を明らかにし、当事者にとっての価値観とコンテキストに基づき実証することを目的とする。

開発実践の文脈におけるジェンダー配慮の重要性は、「人間開発」概念の発展と共に注目を集め、「ジェンダー平等」や「エンパワメント」概念との結びつきを経て、多くの議論が蓄積されてきた。一方、外部者の主導によりジェンダー配慮が図られた結果、既存のジェンダー構造に急激な変化がもたらされ、現地の住民に反感や不適応が生じたり、外部からの押しつけであるとして住民が実践を拒否したりするといった課題も指摘されている。固有の価値観と多様な変化に揺らぐ社会環境において、既存のジェンダー構造をどのように捉え、どのようなジェンダー配慮を行うことが適切であるのかについて、再検討することが求められる。本研究の事例検証を通じて、開発実践におけるジェンダー配慮のオルタナティブなあり方を示すことで、持続可能な開発に向けた新たな視座を提起することを目指す。

【研究の内容・方法】(800字程度)

1) 文献調査:

第一に、エンパワメント概念に着目し、開発とジェンダーの文脈において蓄積された先行研究を整理すると共に、今日的課題を明らかにした。先行研究における課題、すなわち、1)「外部者」による恣意性を暗黙裡に許容していること、2)エンパワメントが分析概念でなく規範概念として捉えられていること、3)「エンパワーする側からされる側へ」という一方向による実践を前提としていること、の3点を解決するための分析枠組みとして、フレイレ(1979)および Rowlands(1997)の議論を援用し、独自モデルの提示を試みた。

第二に、インドネシアにおける開発の歴史的系譜を整理した上で、国家イデオロギーあるいは施策の一貫として、ジェンダー概念がどのように位置付けられてきたかについて変遷を明らかにした。また、調査地である西ジャワ州ボゴール県における地理的背景や農村固有の文化、ジャワ地方やスダ族固有の文化、イスラーム信仰による規範に基づく考え方について整理した。

第三に、エンパワメントに関わる「力」の概念について、ジャワの歴史的経緯や文化的価値観に基づき分析すると共に、当地域の特徴的要素として、西欧社会において蓄積されてきた議論内容との差異を明らかにした。

2) 予備調査の結果分析:

インドネシア西ジャワ州ボゴール県の農村部村落において現地住民の主導により実践する環境啓発活動について、2015年～2019年にかけて複数回にわたり実施した予備調査の結果を分析した。予備調査のインタビュー・参与観察・調査票を用いた該当地域の世帯調査を含むデータ及び情報について、次の2つの研究課題、すなわち、1)人々の言説や実践に埋め込まれたジェンダー認識を明らかにすること、2)人びと自身が実践するジェンダー配慮とエンパワメントのあり方を明らかにすること、を軸として、前述した独自の分析枠組みに照らして検証・考察を行った。(尚、本来は現地渡航および長期滞在を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の影響による厳格な渡航制限のため、今期間中の遂行は断念せざるを得なかった。)

【結論・考察】（４００字程度）

エンパワーメントに関して、主に「力」の概念に着目した文献調査から明らかになったことは、西欧社会において経済的・物質的な「力」という意味合いが強いものであったことに対し、ジャワにおける「力」の意味は、経済的・物質的な意味合いよりも、周囲に対していかに精神的威力や影響力 (potency) を持つかという意味合いが、より優位なものとして捉えられてきたということである。ジャワの女性はこれまで、西欧社会と比較して金銭所有や家計管理を多く担ってきた事実から、一般的には社会的地位が相対的に高いと評されてきた。しかし実際には、「力」としての相対的な価値認識が低い金銭に関わる役割を付されてきた立場であるとも考えることもできる。ジャワの慣習や価値観において、金銭所有や家計管理を担う度合いと、社会的地位の高さが、必ずしも直結していない。従来のエンパワーメント概念が想定してきた考え方との間に差異が生じている可能性が考えられる。

事例分析では、リーダーが活動を展開する際、1) 性別役割を全うすることこそ「男女平等」として、性別役割分業を積極的に取り入れること、2) 女性特有の能力や可能性を潜在的影響力と評して活用すること、など、人びとに根付く既存の価値観を巧みに活用して参加者へ無理のない行動変容を促していることがわかった。また、参加者は、1) 自身が得た体験を周囲の人びとへ共有すること、2) 男女別の生活形態に沿った隙間時間を活用すること、3) メンバースhipやルールの認識や線引きのあいまいさを許容することによって相互の責任を分散すること、といった工夫を通じて、周囲へ行動変容を促している。こうして波及する行動変容は、「リーダーから参加者へ」の一方向ではなく、リーダーもまた参加者から影響を受け、反発や対立、連携や対話など、試行錯誤を繰り返している。活動を通じた学びや体験を分かち合うと同時に、相互に影響を与え合いながら、コストや責任を分け合うからこそ、広く行動変容が促されている。このように、人びとのジェンダー配慮のあり方は、従来のジェンダー平等やエンパワーメントが目指してきた方向性とは異なる特徴を持ち、人びとの「生活知」に根ざして展開されるからこそ、着実な行動変容が実現されていることが明らかになった。